

地域住民による子育て支援の取組みについて —「ひろば型」支援事業の試みと調査研究—

梅 野 和 人

筆者は現代の地域社会に暮らす子育て家族が直面する問題に対して、地域資源を活かした住民相互の居場所の提供と、コミュニティサポートを目的として、2007年9月から大阪府K市の自宅を使って、家族支援活動を行ってきた。子どもを育てている家族支援のあり方として、行政依存の事業ではなく、住民主体の取組みと、その有効性について実践的に考究したいというのが、筆者の基本的な課題意識である。そこで拙稿では、地域を主体にした活動実践と状況把握を行い、さらに利用者がどのように感じているのか、あるいは利用者ニーズがどこにあるのかを量的（アンケート調査－因子分析）、質的（KJ法）側面から調査を行うことによって明らかにする。調査結果から得られたファクターを、「子ども」「地域」の項目に分類して考察し、そこから今後の課題と方向性を明らかにしたい。

キーワード：子育て支援、「ひろば型」支援事業、住民主体、活動実践

I. 本調査研究の意義

今日、子育て支援事業は保育所、幼稚園、児童館などさまざまな分野で取組まれている。現在、各都道府県や市区町村単位で次世代育成支援対策推進法（平成15年7月16日法律第120号）に基づいた行動計画が策定・実施されており、その内容の中では計画の柱や推進方法、具体的な数値目標が立てられ、また「子ども・子育てビジョン」（少子化社会対策基本法平成15年法律第133号第7条の規定に基づく大綱）においても将来的な支援の姿が各々の行政事業目標値によって示されている。これまでの少子化対策に一定の効果が見られるようになり、今後の支援の方向性は量的な支援から、支援内容やサービスの中身へと力点が移りつつある。つまり質的に充実した支援の在り方が問われるようになってきているのが現状であると言える。従来の子育て支援は行政事業が主体であり、保育所や公民館など既存の施設を活用した事業の他に、地域子育て支援拠点事業や保育ママ事業等が実施されてきた。一方で地域住民が発信し、資源となって主体的に支援を行う地域コミュニティづくりも広がりつつある。

地域における子育て支援の考え方について、村山（2007）は、「子育て支援で大事な営みは、地域性、地域での連携ということにある。子育てにとって、地域で子育ての思いを共有し共感しあう営みを築いていけるような多様な人間関係をどのように築いていくかが大切である」と述べ、子育て支援を地域コミュニティ再生の課題の中で捉えなおす必要を提示している。子どもを育てる家族の成長を、世代を越えた地域の人々が見守り、共感する新しい関係づくりが必

要となっているが、実際には保育所や地域子育て支援センター等、行政主導による事業が中心であり、家族援助研究の知見もこの視点の域を出ていない。このような現状の下に、それまで行政主導では届かなかった住民視点の支援活動が課題となっている中、筆者はさらにその形を発展させ、自宅民家を活用した地域住民の子育て支援に取り組んできた。民家活用型の子育て支援は、地域子育て支援拠点事業の一類型である「ひろば型」と呼ばれる。この類型について、渡辺（2004）は「ひろば型」支援事業を実施する特徴のひとつとして民家の活用を挙げており、アンケート調査結果によって、民家（借家を含む）を拠点とした支援は、保育所や公民館と比べて子育てのイライラ感が軽減され、また安心感が高まる傾向が見られることを検証し、その有効性を認めている。

Ⅱ. 取組みの概要

2007年9月より大阪府K市にて、自宅民家を活用した子育て支援に取り組んできた。K市は大阪府の南部にあり、大阪市と和歌山市のほぼ中間に位置している。海に面した臨海部から平野部と山間部まで起伏に富んだ人口約20万人規模の地方都市である。そのほぼ中間部で子育て支援を実施しており、実施日は第1・3水曜日と第2・4土曜日の月4回、時間帯は午前10時から12時および午後2時から4時までである。年に2回程度、地域住民参加の行事を行なうほか、普段は基本的にプログラムを設定せず、訪れた母親と子ども（主に0～2歳児が対象）が自由に過ごしている。また不定期で子育てサークルや母親仲間の行事のために場所を提供するなど、利用者の目的やニーズに対応している。平均参加人数は1日約20組程度である。

Ⅲ. 調査の目的

上記で述べたように、子育て支援の当事者性を持つ地域住民主体の取組みという視点から調査および考察を行った研究は数少ない。拙稿ではこのような類型をとり挙げ、必要性和有意性について調査分析し、さらに地域住民が地域のために行う支援の意味と効果について考察する。その方法として、利用者が地域住民による子育て支援に対する所感について質問項目を設定し、利用目的と子育ての考え方、さらに子育てに必要な視点について量的調査を行った。その調査からキーワードを設定し、さらに質的調査を実施した。このふたつの調査から、住民による地域子育て支援の意味と効果について明らかにすることを目的とする。

Ⅳ. 調査の方法

【調査協力者・調査時期】

量的調査：2009年3月～4月に、地域コミュニティの子育て支援を利用した母親66名（平均年齢：32.9歳、子ども数平均：1.43人、家族構成：核家族88%、三世代家族12%）に対して調査を依頼する。尚、アンケート用紙を68人の利用者に配布し、回収数は66（回収率97.1%）であった。質的調査：2009年11月に、地域コミュニティの子育て支援を利用した4グループ（合計15名）に対して依頼書による承諾を得た後、聞き取りを行った。

【調査回収方法】

量的調査：無記名アンケート調査用紙による記入方式。利用者に質問用紙と切手付き封筒を配布し、2週間以内に投函するよう伝えた。

質的調査：質的調査を行うにあたって個別インタビュー方式とグループ・インタビュー方式のどちらが適切であるかを検討した。インタビューを行う場所が支援施設内であることから、普段の子育て支援の雰囲気尊重することやメンバー同士の相互作用を活用して、詳細なデータを得ることを目的に考慮した結果、グループ・インタビュー方式を採用した。聞き取りは、支援施設を利用した人の中で特徴があると判断したグループに直接調査を依頼し、了承を得た上で調査実施の日時を調整した。その際「聞き取り調査のご協力をお願い」用紙を配布して調査日の確認と当日までに内容を了解して頂くように伝達した。調査当日はインタビューを始めるにあたって謝辞を述べ、次に配布用紙の項目を読み上げて内容を改めて確認した。プライバシー保護の厳守については再度確認した。また記録機器と筆記の使用についてメンバー全員の了解を得た。インタビュー終了後、改めて謝意を伝え、不明な点があれば改めてご協力をお願いしたい旨を伝えた。調査は1グループにつき1回の聞き取りとした。後日逐語録を作成し、KJ法に従ってコーディング以下、分析と考察を行った。

【調査質問の内容】

量的調査：支援内容および特徴についての質問項目は、子育て支援の主体である「親」「子ども」「親子」「地域」の4つをキーワードとして、利用目的に応じた内容として反映できるように配慮した。さらに地域子育て支援における先行研究（渡辺2004）の項目を参考に、当該地域の子育て支援センターの保育士および子育てサロン関係者と検討を重ね、項目を作成した。項目の選定において重複する記述や内容に注意し、子育て支援の所見と子育ての所見、または地域コミュニティとの関連を意図して精選した。作成項目は地域コミュニティの支援に関する項目：19項目 子育ての考え方に関する項目：10項目 地域における支援に関する項目13項目の計42項目である。

各々の項目について、「選択肢から最も近いと思われるものを1つ選んでください」と質問し、「非常にそう思う」「そう思う」「どちらとも言えない」「そう思わない」「全くそう思わない」の5件法で回答を求めた。

質的調査：量的調査によって導かれた「地域子育て支援のイメージ」「子ども・子育て」をキーワードとして、それぞれについて発言を求めた。

【分析方法】

量的調査を基礎として、次の段階に沿って分析を行った。①「地域コミュニティの支援に関する項目」（19項目）、「子育ての考え方に関する項目」（10項目）、「地域における支援に関する項目」（13項目）を対象に因子分析を行う。（Table 1）②因子分析によって導かれた因子にキーワードを設定し、それを基に抽出された因子間相関の検討を行う。（Table 2）③因子によるキーワードから質的調査項目を作成設定し、その質的調査結果をKJ法によって分析し、地域コミュ

ニティによる子育て支援の有意性と方向性を検討する。

V. 分析結果

Table 1 地域子育て支援の利用側面推定尺度の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	M	SD
第1因子「子どもの将来・想い」						
優しく思いやりのある人になってほしい	.627	.137	.170	.365	4.80	0.40
友だちがたくさんいて協調性のある人になってほしい	.738	.036	.258	.181	4.47	0.61
自分の事ができる自立した人になってほしい	.725	.161	.464	.309	4.42	0.63
地域子育てでサークル活動に参加したい	.538	-.071	.109	.531	3.80	0.91
第2因子「子ども・子育ての共感」						
子どもが絵本に興味を持っている	-.010	.611	.137	.077	3.73	0.90
同じ年頃の子どもがいて楽しそう	.129	.645	.240	.407	4.33	0.66
いつもと違う気持ちで子どもと過ごせる	.115	.715	.596	.081	4.27	0.79
利用料が安いと感じる	.138	.580	.137	.139	4.79	0.62
第3因子「安心感・リラックスできる環境」						
落ち着いた雰囲気で気持ちが良い	.312	.178	.932	.263	4.76	0.46
友だちと気軽にしゃべりができる	.386	.295	.729	.281	4.58	0.60
第4因子「関わり・コミュニケーション」						
子育てについての情報交換ができる	.147	.252	.134	.458	3.85	0.74
話し掛けられるのが煩わしいと思わない	.113	.174	.231	.500	4.58	0.63
地域の人同士が交流する場所やイベントに参加したい	.452	-.137	.126	.710	4.24	0.70
興味深いおもちゃがあって子どもが楽しそう	.290	.369	.277	.638	4.56	0.74
寄与率 (%)	24.66	11.26	8.14	5.82		
累積寄与率 (%)	24.66	35.92	44.06	49.89		

量的調査では自宅民家活用型（いわゆる「ひろば型」）の地域子育て支援の印象として11項目について質問した。また子どもへの想いとして7項目を質問した。さらに地域に求める支援の方法について5項目質問し、合計23項目について因子分析を行い、地域支援を利用する要因の尺度化を試みた。

因子分析を行う前段階として、23項目の平均値、標準偏差を算出し、天井効果およびフロア効果が見られるかを検討した。結果、全項目において効果は認められなかった。したがって23項目に対して主因子法（プロマックス回転）による因子分析を行った結果、7つの因子が抽出された。因子負荷量の状況や因子の解釈可能性を考慮に入れながら妥当でないと判断した9項目を除外し、親主体の利用（4項目）、子ども主体の利用（3項目）、親子関係の利用（1項目）、利用料に関する項目（1項目）、利用者の子育ての考え方（3項目）、地域に求める支援（2項目）の14項目について再度因子分析を行った結果、4つの因子が抽出された。回転前の4因子で14項目の全分散を説明する割合は49.89%であった。抽出された4つの因子について、次の

ように命名した。第1因子は4項目で構成されている。子どもの将来的な願いや想い、さらにそれに連なる地域との結びつきを表す因子としての項目が高く負荷していることから「子どもの将来・想い」因子と命名した。第2因子は4項目で構成されている。子どもの行動や存在を中心として、興味のあることに共感したり普段と違う環境の中で子育てを見直す気持ちが表れたりしている項目が高く負荷していると考えられることから、「子ども・子育ての共感」因子と命名した。第3因子は2項目から構成されている。子どもと一緒に過ごすことが前提であるが、家族（特に母親）にとって癒しやくつろぎを大切にできる空間として利用する側面が表出する項目であると考えられる項目であると考えられ、「安心感・リラックスできる環境」因子と命名した。第4因子は4項目から構成されている。子どもに関わることや子育てに関してコミュニケーションを大切にしたい気持ちを表す項目であると考えられることから、「関わり・コミュニケーション」因子と命名した。これら各因子について、構成する項目の平均評定値と標準偏差から地域子育て支援を利用する家族における傾向を見る。各項目の平均評定値は4.37であり、4つの因子寄与率は49.89%であった。また全分散からの割合は比較的低位であり、各因子間の相関関係があることが考えられるため、因子間相関の検討を行った。

Table 2 因子間相関

	F1 子どもの 将来・想い因子	F2 子ども・子育て の共感因子	F3 安心感・ リラックス環境因子	F4 関わり・コミュ ニケーション因子
子どもの将来・想い 因子	1.000	0.046	*0.334	*0.447
子ども・子育ての 共感因子	0.046	1.000	*0.360	0.158
安心感・リラックス 環境因子	*0.334	*0.360	1.000	*0.227
関わり・コミュニ ケーション因子	*0.447	0.158	*0.227	1.000

* $p<0.05$

第1因子である「子どもの将来・想い」因子は、平均評定値が4.37と高率であった。また第3因子「安心感・リラックスできる環境」因子（ $r=.447$, $p<.05$ ）と第4因子「関わり・コミュニケーション」因子（ $r=.334$, $p<.05$ ）と、やや弱い相関があることが分析結果から読み取れる。第1因子の項目「地域子育てサークルに参加したい」（ $M=3.80$ $SD=0.91$ ）は、第4因子の項目「地域の人同士が交流する場所やイベントに参加したい」（ $M=4.24$ $SD=0.70$ ）と、やや弱い相関があると判断される反面、 SD にばらつきが見られることから、利用者は地域との繋がりの深さにおいて相違があると考えられる。つまり子育て支援を利用することと地域との関わりを積極的に持つことが、利用者にとって同義となっていないことを示している。これらから子どもの将来や子育てについて自分なりの明確な考えを持っている親が、安心感やリラックスできる環境に促されながら、他の親と関わったりコミュニケーションを図ったりすることによって、共

感や前向きな気持ちを持つ結果に繋げている傾向がみられる。また、第2因子 ($r=.360, p<.05$) の「いつもと違う気持ちで子どもと関わる」項目が、第3因子と共通するのは、安心感やリラックスできる環境の中で、子どもとの関わりを見直しているということである。つまり安心を感じる環境は、親が子どもとの関係改善、または親自身の気持ちのリラックスに効果があると考えられる。第2因子の項目「いつもと違う気持ちで子どもと過ごせる」($M=4.27$ $SD=0.79$) に注目すると、第3因子「安心感・リラックスできる環境」因子と、やや弱い相関がある。これは子どもとの関係において、親がリラックスして安心感を抱く環境に居ることで、子育てを客観視し、子どもとの関係（「子どもが絵本に興味を持っている」($M=3.73$ $SD=0.90$) , 「同じ年頃の子どもがいて楽しそうだ」($M=4.33$ $SD=0.66$))を見直すきっかけになっていることを示しているといえる。第4因子の「関わり・コミュニケーション」因子は、子育ての仲間、子ども、地域など様々な関わりに関連している。コミュニケーションへの積極性が、子育てにも影響を及ぼしていると考えられる。

以上の結果から、「子どもの将来・想い」「子ども・子育ての共感」「安心感・リラックスできる環境」「関わり・コミュニケーション」という因子を抽出した。4つの因子を、「安心感・リラックスできる環境」＝地域子育て支援のイメージ、「子どもの将来・想い」「子ども・子育ての共感」「関わり・コミュニケーション」＝「子ども・子育て」という2つのキーワードに要約した。この項目を基に、さらに利用者の目的と支援の効果について考察するため、引き続き質的調査を行った。調査結果はKJ法で分析を行った。4つのグループごとに記録したインタビューのテープから逐語記録を作成し、各グループの逐語記録をコード化した。コード数はGroup1:136, Group2:294, Group3:190, Group4:286であった。記録から「支援のイメージ」と「子ども・子育て」に関する内容を取り出してコーディング作業を行い、コード数を分類したのがTable3である。次に得られたコードから各グループ別に考察する。

Table 3 各グループの概要及びコード内容

	Group1	Group2	Group3	Group4
人数	2人(女2)	5人(女5)	2人(女2)	6人(女3, 男3)
住地域	市内・同地域	市内・同地域	市内・異地域	市外
住期間	3年以内	3～5年	5～8年	5～30年以上
特徴	別地域から転居	利用期間が長い	サークル仲間	障害児を持つ
全コード数	136	294	190	286
支援のイメージ	42 (30.8%)	95 (32.3%)	43 (22.0%)	51 (17.8%)
子ども・子育て	33 (24.3%)	92 (31.3%)	48 (25.3%)	102 (35.7%)

VI. 質的調査の結果と考察

Group1の結果と考察

【地域住民の支援】

「家ようだし、人数もそれほど多くなくのんびりできる」「お茶が飲めるのが良い」「子ど

もより母親のための場所という印象が強い」などの感想が多かった。また「自転車で来られる所だから」や「支援施設は子どもを遊ばせる所で、親はホッとできない」など、保育所等の子育て支援と比較して、実際の距離と心的な距離のいずれも身近であると感じている発言が目立った。一方、支援を利用することで親子関係の確認や見直しができるなど、ポジティブ傾向の発言は無かった。

【子ども・子育て】

特に注目したのは子ども理解と知識の欠如であり、「朝から晩まで付き合っってこんなに大変だと思わなかった」「知らなかった」「全然分からなかった」という発言によって、子ども理解が不十分であり、心の準備がないまま妊娠出産を経て、現状に戸惑いや不安を持ちながら子育てを行う状況にあることが分かる。また子育てに関連して、家族の存在について問うたところ、パートナーの存在について「旦那はそんなことが分からない」「旦那に一週間（子育てを）体験してもらいたい」など、夫が子育てにおける協働者として極めて希薄な存在であることが推察された。実際の子育て協働者として挙げたのは祖父母の存在で、「祖父母が預かってくれる時もある」と依存しながらも、「しょっちゅうは言い難い」「こちらから預かってくださいとは言えない」など、微妙な心理状況がみられた。家族、特にパートナーの存在に対して子育てを協働することを強く求める傾向が推察される。

Group2の結果と考察

【地域住民の支援】

支援者自身が「温かく見守ってくれる感じ」「話を聞いてもらえる」と、地域住民の人的環境として受けとめられているといえる。また「自分がリラックスするために利用している」「私が癒される、ホッとできる所として利用している」「子どもの様子が何時もと違う」など、全体的な印象として親子が互いにリラックスするなかで、関係の見直しや普段と違う関わりが生まれるきっかけとなっている。「同じ年齢のお子さんを持つ親が来ているので悩み事など話したり情報交換できるのが良い」「その場で話し始めたり友達になったりできる」という発言では、コミュニケーションの場所として認識され、また「（開いている日が）月4回だから意識して利用しようと思う」と、日常の子育ての中で、対面的な親子関係から一時的に開放され、息抜きする機会としても認識している。

【子ども・子育て】

普段の子育てについて「どういうふうに言ったら良いんだろう」「どうしたら良いんだろうって思います」「ほんとに（上手く）出来るのかな」「日々悩みながら」と、親の迷いや不安についての発言が多く聞かれる。親の考えとして、親自身の発言の中には子どもへの過重な思いが感じられる。その思いが、かえって子どもに芽生え始めた自我の受け止め方を混乱させている。結果として親の育児観と子どもの成長の狭間で、どのように子育てをしていけば良いのだろうかとか常に疑問を抱きながら葛藤する状況が起きている。5人中2人が育児休暇中、他の3人は現在仕事をしていて、継続しようと考えている。社会とのつながりを持ちながら子育てをすることについて、どう感じているか問うたところ、「ふたりきりだと大変だった」「逆に子どもに

対してもイライラした」「一年〈間〉一緒にいたけどそれがやっぱりしんどくて」「家の中で子どもと二人きりって(我慢)できない」など子育ての閉塞状況が強く感じられる発言が多かった。

Group3の結果と考察

【地域住民の支援】

利用について「子どもが主役の所が多いけど、ここは自分が行きたくなる、そういう感じ」「自分がのんびりまったりしに来るところ」と、親が主体となって利用している。また支援の取り組みに対する印象として「なんとなくここは自分が主体になっている気がします」と発言している。他の施設がどのような形態のものを指すのか判然としないが、子育て支援をイメージする一面について述べられている。「他のお母さんとも話せる距離」「親子カフェは親と子どもが分かれるし、同じ目線に立って遊べるのも良い」と、多様なコミュニケーションの場所として利用する傾向が見られた。

【子ども・子育てについて】

「地域のイメージが先行していて、上の子の時は地域との繋がりを避けて育児をした」が、「自分が背を向けていただけで、自分を開けば全然温かいし、付き合い易い」と、1人目の子どもが手を離れて、子育てを客観的に振り返ることができたことで、2人目の子育てに対して肯定的に捉えられたと述べている。子どもを育てる上で、地域への先入観を持っていたが、このグループの場合、子どもが媒体となって地域へのつながりを深めたことが挙げられる。また「最初は適当で良いんだと思っていて、いやいや適当ではあかんと思い直して、今はまた適当で良いと思って」「子どもが大きくなって小学校に行けば地域と関わりも出来る」など、地域との繋がりが子どもの成長によって深まることを実感している。

Group4の結果と考察

【地域住民の支援】

親が主体的に利用する傾向が強く、「ホッとできる空間だなと感じた」「すごく温かい雰囲気」「地域のホッとステーションみたいな感じで、こういう場所が他にもあったら喜ばれる」などの所感があった。反面、子ども主体の利用に関する発言は少なく、おもちゃに対して「子どももすごく興味を示す」のみであった。他には「(健常児の)お兄ちゃんやお姉ちゃんが宿題をしに来るとかがあったら良いな」という発言があり、利用対象である乳幼児が主体となって遊ぶことを期待したり、子どもの遊びを見たり感じたりする発言は極めて少なかった。

子どもの様子や遊びに対して関心が低いことは、グループの特徴の一側面を表していると言える。

【子ども・子育て】

「地域で普通の生活が出来るようになってくれたらそれで良いかなと思う」「同じ学年の子や地域の子も達と関わってくれたらと言うのがある」など、子どもの将来に対する不安や不透明感への戸惑いなどが発言に読み取れる。また「兄弟関係を作っておくために、上の子どもをしっかりと見なさいと言われた」の発言から、障がいを持った子どものことが気がかりであるこ

とは勿論であるが、いずれ兄弟が成長し互いに助け合える関係作りを意識することが必要であるとの発言もあった。「大きな期待は持てない」「地域に受け入れられれば」「子どもの力を信じようかと思う」など子育てに関する発言からは、親自身の気持ちが揺れ動きながら、自己反省と葛藤を繰り返している状況であることが読み取れる。子どもを取り巻く状況と子どもの成長について常に日々悩み、親としての在り方や役割について、さらに模索を繰り返しながら、期待を込めて見守っていかうとする姿が、育児を通して垣間見ることができる。

Ⅶ. 結果の考察と今後の課題

村山が述べた「地域で子育ての思いを共有し、共感しあう営みを築いていけるような多様な人間関係」は、住民相互が普段から子どもの成長を中心に共感できることで継続的に共有され積み重ねられていく。地域住民による子育て支援の取組みは、多様な人間関係を築くことができる場所と機会を提供することに意義がある。子育てに不安や戸惑いを感じる家族の特徴的な要因の一つとして挙げられるのは、地域とのつながりをどのように持っているかが子育ての感じ方に大きく影響していることであった。新しく地域に転居してきた家族にとって、子どもが乳幼児期で地域とのつながりが希薄な時期は、親子の関係だけの閉塞状況に陥ってしまいがちだが、子どもの成長によって地域との結びつきが出来、さらに強まることで子育てにも余裕が持てるなど、ポジティブな側面が強まる傾向が表われる。つまり、子どもを持つということは、家族が地域とのつながりを持ち、根付かせていく重要な要素であると言える。地域の子育て支援の利用者は、年齢や住環境、経験から子育てに期待・不安・戸惑い・葛藤などの気持ちを抱えているが、同時に子どもの存在を肯定的に受け止め、子育てを前向きに捉えようとする気持ちも存在している。そのような利用者にとって、地域住民の支援に対する安心感と親近感が最も重要であり、それに支えられて対子ども、対家族、対支援者などの対人関係構築におけるコミュニケーション形成が、可能となっていくと考えられる。

しかしながら、こうした支援活動における問題点は、利用するのは子どもが乳幼児期にある家族のみに限定されるとしても、その利用期間は極めて短い点である。まして、その間に家族が地域との繋がり必要性を感じ、自ら関わっていかうとするきっかけ作りを担っていくことは時間的に難しい。今回の調査では現時点での利用者の子育てや子ども、家族についての状況やニーズについて知ることが出来たが、今後、利用者への継続的な利用による子育てニーズの変化や子どもへの関わり、家族の変化などを調査する事によって、長期的支援の利用効果を明らかにする必要があると考えている。

また、今回の調査研究では、地域住民主体の子育て支援の有効性について述べるにとどまっている。今後、行政主体の子育て支援の受けとめられ方との比較・対照を行うことによって、利用者のニーズの相違点および類似点について検証、調査を継続していきたい。

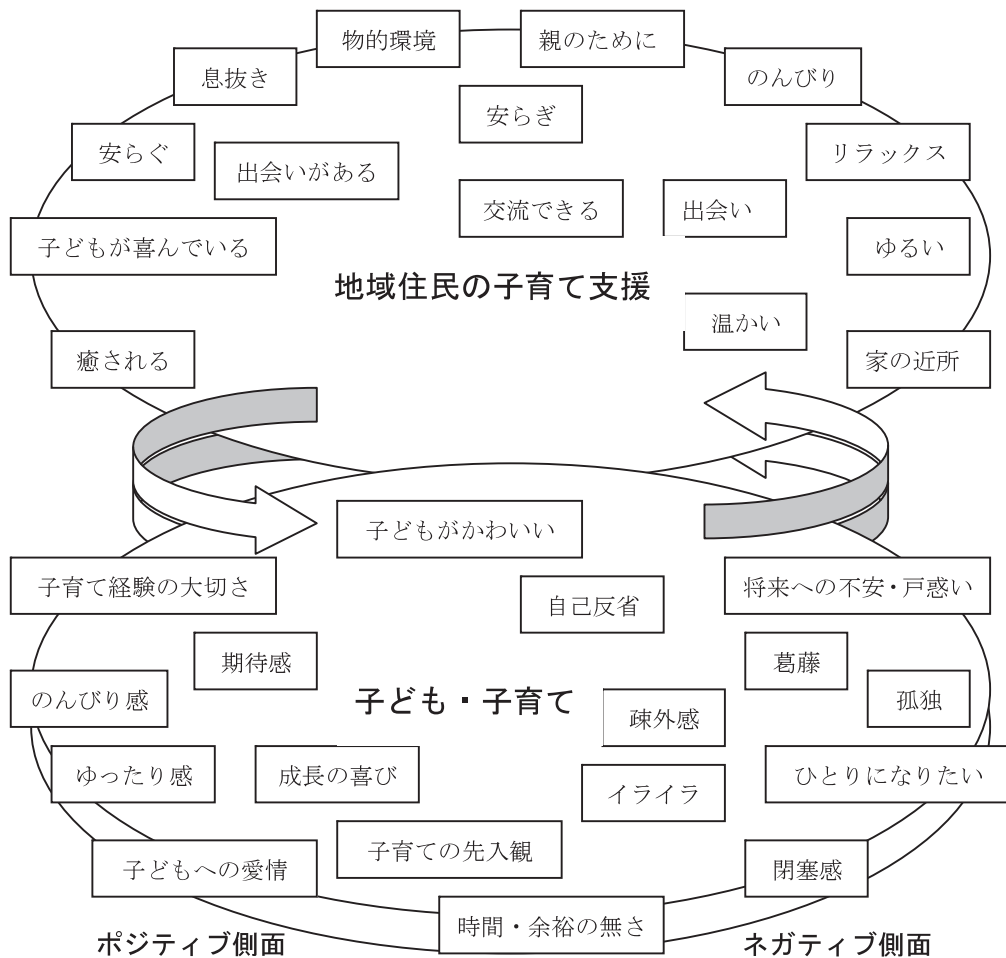


Fig.1 質的調査による「地域住民の子育て支援」と「子ども・子育て」の相関

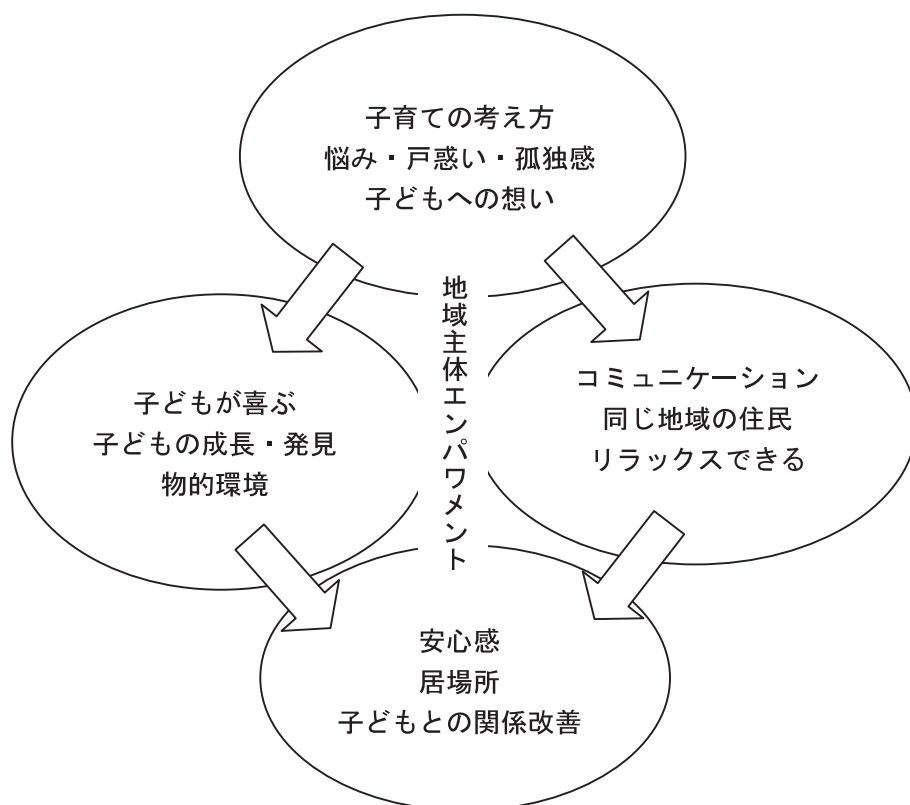


Fig.2 調査結果に基づく支援を利用する家族の気持ちの流れ

引用・参考文献

- 1) 大野祥子 (2008), 育児期男性の生活スタイルの多様化－「稼ぎ手役割」にこだわらない新しい男性の出現－, **発達心理学研究**, 第22巻, 2号, p 107-118
- 2) 大元千種 (2010), 父親の育児参加とその支援について－Supporting father involvement in child care－, **筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要**, 第5号, p 187-195
- 3) 柏木恵子・若松素子 (1994), 「親となる」ことによる人格発達－生涯発達の視点から親を研究する試み－, **発達心理学研究**, 第5巻, 1号, p72-83
- 4) 菊池信子 (2008), 地域におけるソーシャルワーク実践としての家族支援の検討, **神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要**, p 13-26
- 5) 寺田清美 (2008), 父親準備性を育む活動の広がり, **世界の児童と母性**, 第65巻, p 55-58
- 6) 村山祐一 (2007), 子育て支援施策拡充の視点を考える, **保育学研究**, 第45巻, 第2号, 日本保育学会, p164
- 7) 村山祐一 (2006), 地域社会の中の子どもと保育所・幼稚園の課題－子育て環境格差の広がりと一元的児童福祉行政の推進－, **保育学研究**, 第44巻, 第1号 日本保育学会 p 22
- 8) 吉永茂美 (2007), 育児ストレス過程の一考察, **岡山県立大学保健福祉学部紀要**, 第14号, p 11-18
- 9) 渡辺顕一郎 (2004), **地域で子育て－地域全体で子育て家庭を支えるために－**p75-78, 川島書店

- 10) 文部科学省科学研究費助成事業・子育て支援に関する共同研究プロジェクト（基盤研究B-1課題番号14310123 代表村山祐一「保育・子育て全国3万人調査」
- 11) 共生社会政策統括官少子化対策『平成16年度版少子化社会白書』内閣府「出生の動向の特徴」1章第3節